

うしお

第 110 号

昭和 40 年 7 月

目 次

本年前半までの主漁業の漁況 概要	漁業部 竹下克一	1
昭和 39 年度のり養殖概況	養殖部	5
定置観測 (6 月分)	〃	11
漁村のことわざ (その 3)	北山易美	12
奄美短信	大島分場	14
養魚場の動き	大口養魚場	15
業務概況	編集部	18
人事異動	〃	20

鹿児島市城南町 20 番 12 号

鹿児島県水産試験場

本年前半までの主漁業の漁況概要

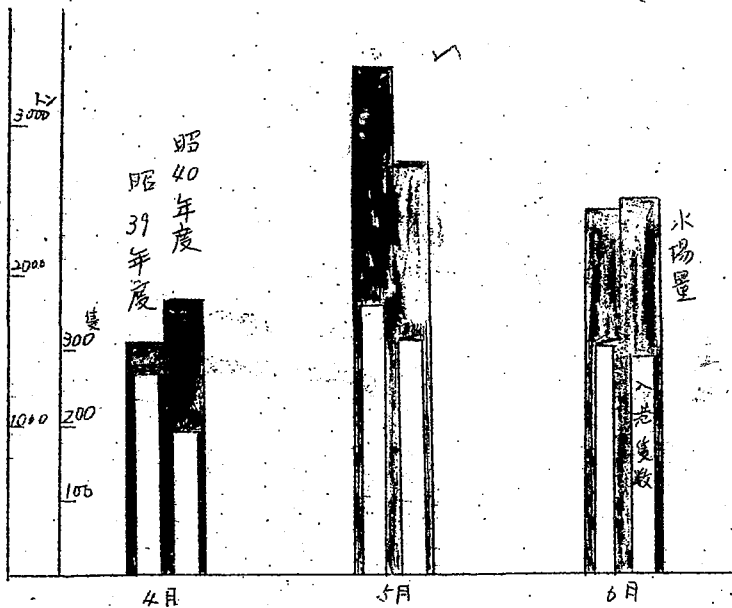
漁業部 竹下 克一

※ カツオ漁況

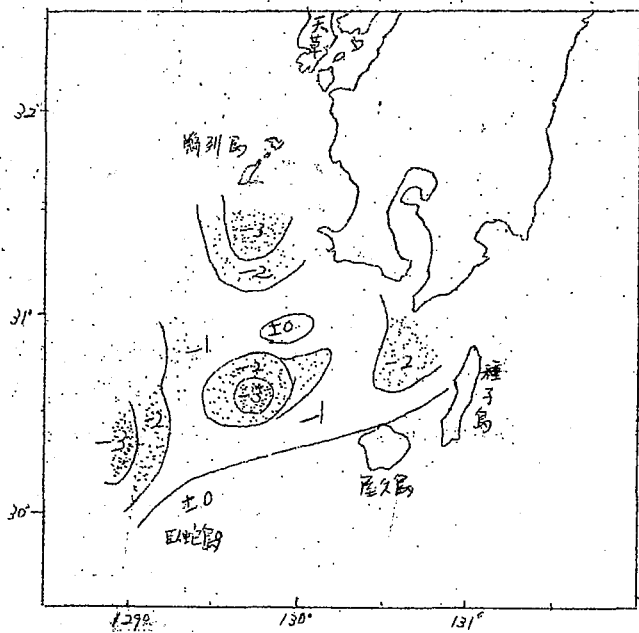
盛漁期である4月～6月までの県下の(山川港並びに枕崎港)水揚高量並びに入港漁船数を昨年同月と比較して見ると(小型船のみ)第1図の様で4月の水揚高は昨年の1,560屯より300屯余り多い1,850屯の水揚がなされたが最盛期たる5月では昨年の3,380屯に比べ600屯少ない2,770屯にとどまつた。4月～6月迄の合計では昨年の7,390屯に対し本年は7,130屯で約260屯少なく昨年の96%であつた。この様に漁獲量だけから見れば昨年と大差なく1隻当り漁獲量にしても昨年の785屯に比べ本年は885屯と大差なかつた。然し例年は短期間の操業で入港し最盛期にはいわゆるピストン操業が行なわれるのであるが本年は操業日数が長く、見かけ上だけの昨年並みであつた。

今本年の実質操業船数が昨年と変らない船数で操業がなされたとすれば次の様になる。

	4月	5月	6月	計
操業日数で約	28%増	12%増	5%増	10%増
漁獲量で	16%増	18%増	2%増	4%減



第1図 カツオの漁獲量と入港隻数



オ之図 昨年と本年5月上旬の水溫差

即ち4月では航海日数では昨年より約3割長くなり、漁獲は1割余りしか増加せず5月では日数で1割余り長くなりその上漁も2割近く悪かつた。6月では昨年より若干悪かつたが大體昨年に近い漁となり全体として本年は1割～2割近く昨年より不漁で特に5月の不漁が目立つたと言ふ事が出来る。

この様に本年の春漁が悪かつた原因について先ず考えられるのは4～5月頃の冷水現象がある。

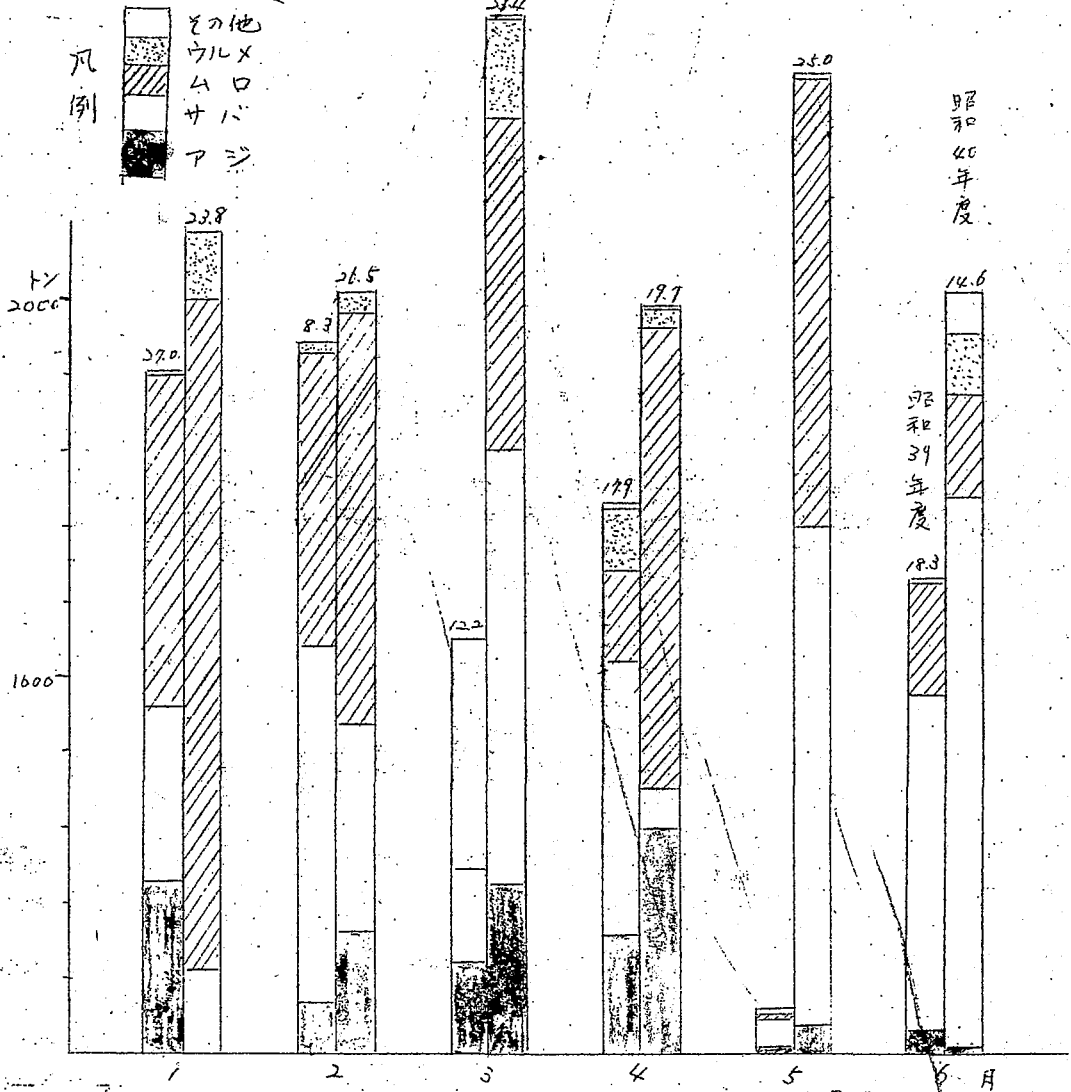
本県近海の水溫は冬期3月上旬頃までは大體平年並の水溫値を上下していたが3月以降の水溫の上昇期になつても目立つた上昇がなく、4月～5月では2～3℃内外例年より低い海域が多かつた。第2図の様に5月になつても県西南部海域は以然として冷たく草垣島方面には草垣冷水域が見られ、こしき島近海では今だ19℃台の水溫が残つていた。従つて例年ならばこしき島～草垣～黒島方面にカツオ群が見られ、小型船では日帰り操業が行なわれるなど活況を呈するのであるが、本年はこの方面での漁場がほとんど形成されず屋久島以南のみであつたので自然一航当りの航海日数も延びた。又4～5月頃の盛漁期には一部大型船も近海域で操業するのであるが本年は5月には1隻の入港船も見られなかつた。

尚1昨年(38年度)冷水の発達した年も本年同様春漁は香しくなかつた。

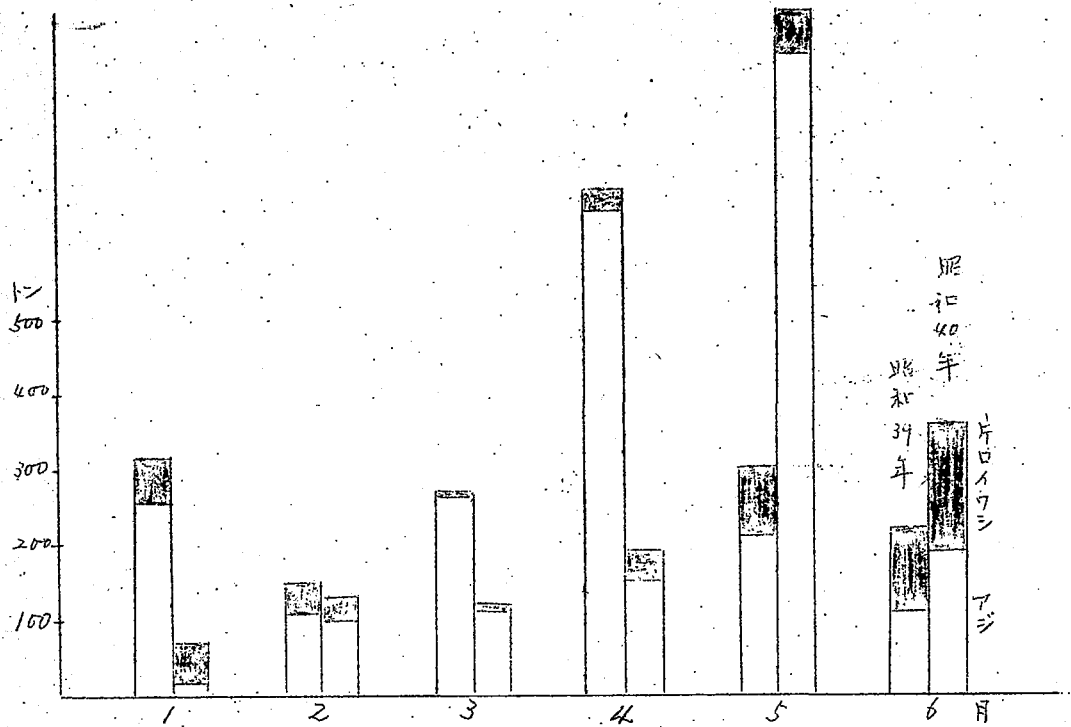
次に聞取調査によれば屋久島以南でのカツオ群は例年より決して少ないとは思われないが、只、餌持群が多く曾根付群で好漁する事は例年に比べ非常に少なく、「流れ」を発見した時のみ好漁をなしたと言ふ業者が多かつた様に餌持が例年より多く餌付が悪かつた事も今年の特徴と思われる。

※ アジ・サバ漁況

第3図は枕崎港に水揚げされた巾着網による漁獲量の昨年との比較図であるが各月とも昨年を上廻つた漁獲がなされ特に本年はムロアジの漁が目立つて良く冬期から引続いて5月頃まで種子島南～東北岸沖に於てムロ、アカムロ、サバを中心に好漁が続き、アジ、ウルメ等も昨年より好漁をなした。又ムロアジに次いで5～6月にはサバ漁が昨年より相当良かった。これは巾着網漁業だけでなく近海の小型釣サバ船でも同様に屋久島北側のサガリ曾根附近が漁場となり1航海当り3晩操業で4トン以上の漁が多く昨年より約5～6割増の好漁であつた。



第3図 枕崎港に於ける巾着網の魚種別水揚量



第4図 阿久根港に於けるアジと片ロイワシの水揚量

※ 近海釣サバ船の5～6月の入港状況

港		39年		40年	
		隻数	水揚量 トン	隻数	水揚量
鹿兒島	5月			47	176.2
	6月	11	30.2	143	518.0
阿久根	5月	7	28.8	29	84.8
	6月	65	145.5	73	263.5
合計		83	204.5	292	1042.5

尚漁場の主体は前記下り曾根であつたが、5月上旬頃宇治群島でも若干漁が見られたが、たいした事はなかつた。又、本年の操業船は種子島東沖の近海マダロ延縄漁業同様県外小型漁船の進出が相当数あつて昨年の3.5倍にも達し、漁獲量は1,000トン以上となつた。

次にアジについては1月頃までは香しくなかつたが本県南部海域では2月頃より好転し3月～5月迄は巾着網は勿論湾内の八田網、こしき方面の定置でも昨年より上廻る漁事があつた。(川尻の定置では香しくなかつた)北薩の阿久根港では引続いて4月頃まで昨年より相当悪かつたが5月に至り始めて良く、5月の入荷量は昨年の4倍以上に達した。(第4図)

※ マイワシ漁況

マイワシは昨年4月に阿久根沖で始漁を見、6月より漁期に入り8月を最高に39年度は488トンの漁獲を見て急激な漁獲量の増加となつたので本年も期待されていたが6月中の水揚げは今だ1トン内外で昨年6月の40トンに比べ非常に少なく漁期が遅れているのかどうか現在のところ今だ不明である。

※ その他の漁況

沖合マグロ延縄漁況については毎月資料を掲載してあるので省略するが、種子島東沖の小型延縄船は昨年割合好漁を見たので本年は各地より多数の漁船が集まり相当賑わい、漁は昨年程ではなかつた様であるが好漁した漁船もあり不漁年であつたとは言えない様である。

その他近海では昨年12月以来春期までこしき島周辺を皮切りに枕崎沖～黒島～佐多沖合のヨコワ曳縄漁が近年にない好漁を見て漁期も例年より長く小型漁船は良かった様である。又、沿岸各地では冬期キビナゴ漁も本年は割合良かった事も本年の特徴の一つであろう。

次に熊毛地方のトビウオ漁であるが、この漁業は熊毛地方にとつては重要な漁業であるので過去の資料の分析、調査船による調査等を総合して本年度の漁況の見透しを立てたところ不漁年との見込みを立てなければならなかつた。漁は後半若干好転した様ではあるが不幸にそれが適中した様で最終の集計を見なければ明らかでないが近年における最低の漁獲量であつた様である。

以上の様に本年上半期の漁況はカツオ、トビウオ等暖流系統の漁業に不漁が多く温暖系統の漁業は冷水現象の為漁期の遅れた漁場も多かつたが一般に好漁であつたと看做すべきであろう。

昭和39年度のり養殖概況

養 殖 部

1、施 設 数

第1表に示すように県下15ヶ所で330経営体が、網ヒビ6414枚、女竹ヒビ58900本を建て込んで養殖した。

漁場15ヶ所のうち、本年はじめて試験的に養殖を始めたところが国分漁協で前年度養殖した加世田、あい良、加治木、高須漁況は本年は養殖しなかつた。

経営体数は一般に増加の傾向を示し、330経営体と前年度より64経営体増えた。

網ヒビは出水の1600枚増をはじめ、各地区とも増加し、総数6400枚と前年度(3450枚)の1.8倍と急増した。一方、女竹ヒビは前年度と変わらず59000本であつた。

採苗別にみると、網ヒビのうち人工採苗によるものが約70%を占め、年々増加しているが、地元での人工採苗は僅か14%に過ぎず、他県からの移殖ヒビに依存している。

2、生産量

第2表に地区別の生産状況を示した。

県全体の生産枚数は47.2万枚4350万円と今までの最高をあげたが、これは網ヒビ数の増加によるもので、網ヒビ1枚当りの生産量は736枚と不良作となつている。地区別の単位生産量からみて出水、野口、川内、岩本、垂水の5ヶ所は平均1000枚内外と平年作柄をあげているが、谷山、鹿兒島地区が凶作となつたために県平均が不良作となつたもので概して普通作の年であつたといえる。

第1表 地区別・採苗別ヒビ数

ヒビ地区別	経営体数	網ヒビ (枚)					計	女竹ヒビ (本)	移殖ヒビの採苗地
		天然採苗		人工採苗					
		地元	移殖	地元	移殖				
出水	157	1,140	0	380	2,240	3,760	54,400	佐賀 熊本 福岡	
野口	17	190	0	0	0	190	2,200		
東町	8	6	0	121	0	127	2,300		
長島	19	50	0	0	62	112	0	出水	
川内	12	0	0	0	120	120	0	出水 佐賀	
串木野	4	0	0	130	0	130	0		
手打	4	0	12	0	0	12	0	出水 佐賀	
笠沙	2	0	0	0	6	6	0	出水	
指宿	6	0	14	0	0	14	0	出水	
岩本	1	0	0	0	36	36	0	熊本	
喜入	13	10	0	0	28	38	0	熊本	
谷山	37	0	0	180	780	960	0	熊本 出水	
鹿兒島	27	0	453	0	297	750	0	熊本 福岡 佐賀 出水	
国分	4	0	0	0	15	15	0	出水	
垂水	19	0	52	92	0	144	0	出水	
計	330	1,396	531	903	3,584	6,414	58,900		

※ 漁協からの報告資料によつた。

第2表 地区別生産量（農林統計より）

地区別	生産量（千枚）				ヒビ1枚当生産量（枚）	備考
	くろのり	まぜのり	あおのり	計		
出水	2127.3	1726.9	118.6	3972.8	984	
野口	185.9	75.9	35	265.3	1338	
東町						
長島	2.3	3.4	4.7	10.4	92	
川内	121.7	30.7	0	152.4	1270	
串木野	27.4	7.6	3.3	38.4	295	
手打	1.7	0.2	0	1.9	154	
笠沙						
指宿	0.4	0.1	0	0.5	32	
岩本	43.0	0	0	43.0	1194	
喜入	4.7	4.7	14.0	23.4	614	
谷山	28.0	10.0	0	38.0	40	
鹿兒島	4.0	0	0	4.0	5	
国分	0	0.4	0.2	0.6	36	
垂水	109.2	7.4	58.0	174.6	1212	
計	2655.5	1867.3	202.2	4725.0	736	

※ 漁協からの資料（手打、長島、国分、指宿）

第3表 鹿兒島県の年度別生産状況

年度	経営体数	生産枚数（千枚）	網ヒビ1枚平均生産量（枚）	備考
昭和30	116	432.7		農林統計
31	95	1230.5		〃
32	190	1378.1	382	〃
33	197	2199.2	733	〃
34	230	934.8	467	〃
35	256	2291.3	725	〃
36	199	3039.8	1062	水試統計
37	268	4080.9	1482	〃
38	266	3003.0	801	〃
39	330	4725.0	736	農林（1部水試）統計

3、昭和39年度の気象海況

○ 水温（水試資料）

39年度漁期中の水温は一般に平年よりやや高目が続いて、3月になつて平年値を下廻つた。Fig. 1に示すように月平均水温は36～38年度の過去3ケ年よりも1℃内外高目を保つていた。

○ 気温（鹿児島地区气象台資料）— Fig. 2

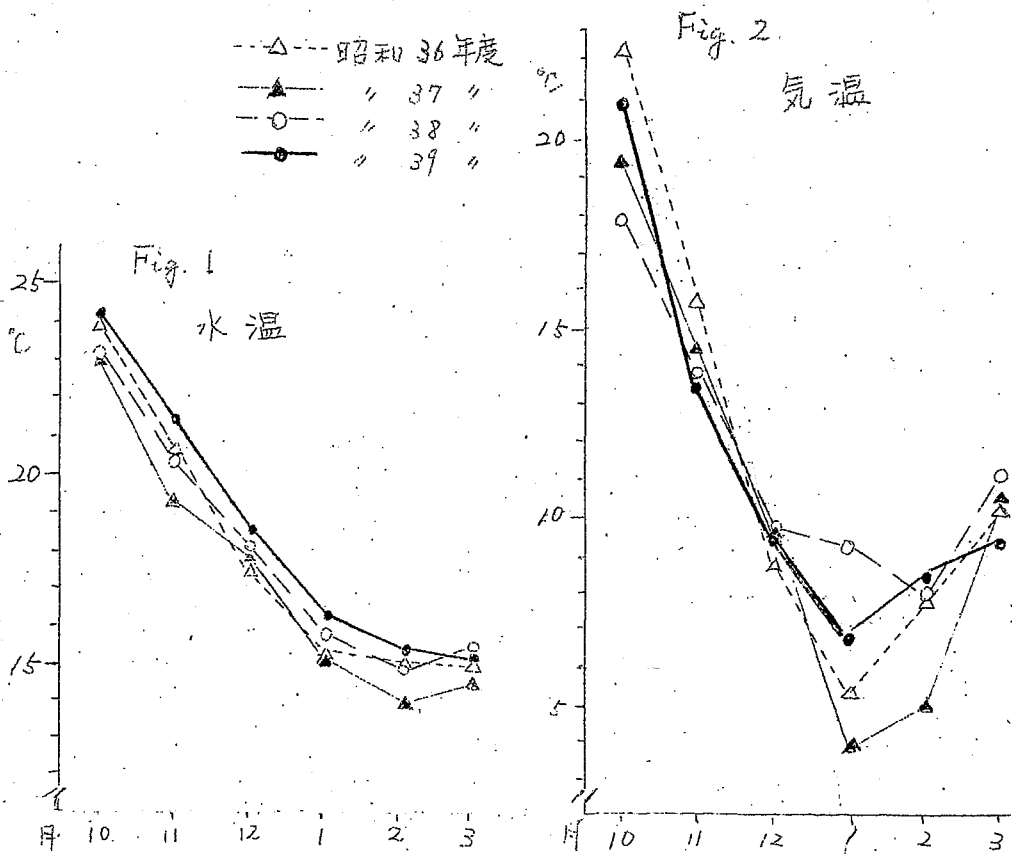
10～12月の間は平年並であつたが1～2月が高く38年の不作年に似た暖冬の年であつた。

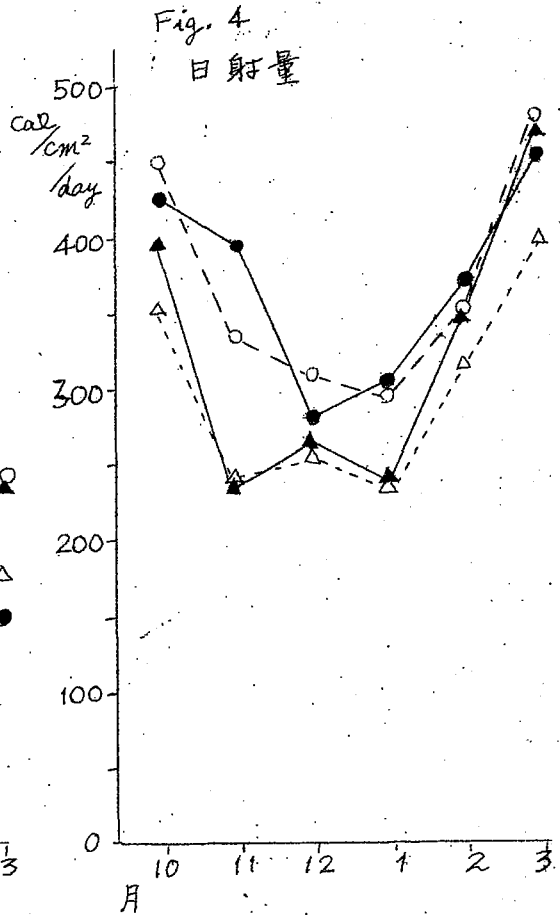
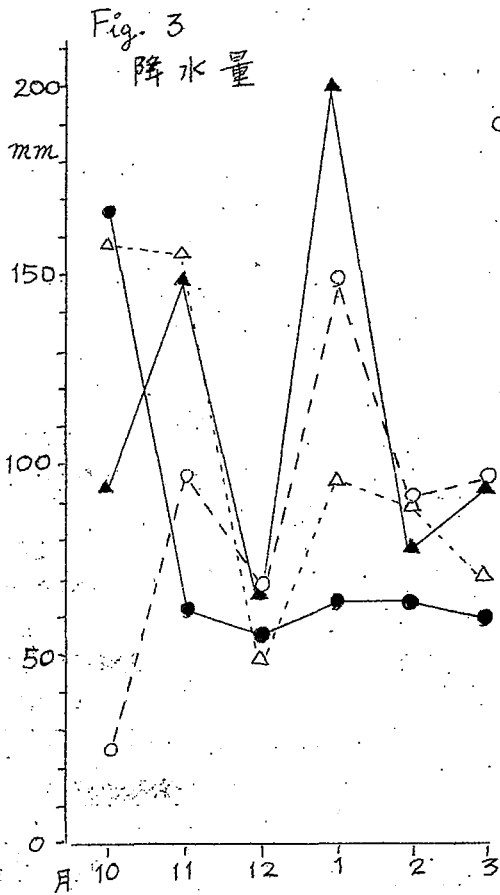
○ 降水量（气象台資料）— Fig. 3

10月は170mmの多雨であつたが、11月以降3月までは60mm内外と寡雨であつた。

○ 日射量（气象台資料）— Fig. 4

過去3ケ年に対比し一般に日射量は大きく、特に発芽生長期の11月に晴天が続き日射の強かつたことがあげられる。





4、39年度の漁期の特徴

○ 採苗期

10月の採苗期は水温の変動が激しく不安定な海況を示し、平年よりやや高目であった。出水地区で10月上、中旬に室内採苗、中、下旬に野外採苗が行なわれた。芽付きは野外採苗で1cm当り5~10個の平年並であった。概して本年はアオノリ類の着生が目立った。

○ 生長期

出水地区の移殖ヒビは11月下旬に入つて摘採がはじまり12月に盛期を迎えた。鹿児島湾地区は12月上旬に僅かなところで手入れがあつたが、12月下旬~1月上旬まで本格的な生産となつた。谷山、鹿児島漁場ではノリ芽の枯死、脱落があり、2次芽どりを行なつたが生産に結びつかず凶作となつた。これらは芽イタミ、白グサレ等によるものと考えられた。一般に本年は2次芽の生長が悪く生産に結びつかない。

○ 本年度はノリ生産層がかなり低かつたようで、平年並の干出操作はノリの

・ 生長が遅く、低張りしたヒビで順調な生産を挙げたことが特徴である。

○ アカグサレは出水漁場で11月下旬からみえはじめたが、蔓延することなく大きな被害はなかつた。

5. 共 販 状 況

県漁連主催による出水共販は36年度からはじまり4年目を迎えた。本年度は12月13日を第1回に3月1日まで6回行なわれた。総出荷量は今までの最高を示し400万枚となり総生産量の85%を占めている。

地区別出荷量は8地区から出荷され出水漁協が92%を占め、前年度とほぼ同様の割合を示し、野口漁協5%、川内漁協1%、その他5漁協が3%となつて

ている。共販による海苔の単価の変動は第4表に示すように、12~1月中旬までの当初3回の共販が10~11円台であり、2月1日の第4回共販以降は次第に単価は下落した。下落の主因は全国的な豊作と、漁期後半の海苔品質の低下によるものである。

この出荷状況から推しても判るように、本年の漁期は1月を盛期として、2月一杯で終漁し、37、38年度は4月まで共販が行なわれたのに対し、漁期が短かかつたことを示している。

このことは前述したように、2次芽網の生産不振によるものと考えられる。

第4表 時期別共販状況

共 販 月 日	く ろ の り		あ お の り		合 計	
	出荷量(千枚)	平均単価(円)	出荷量(千枚)	平均単価(円)	出荷量(千枚)	平均単価(円)
1 12,13	4063	11.07			4063	11.07
2 12,26	5968	10.09			5968	10.09
3 1,18	1163.7	11.24	0.3	4.80	1164.0	11.24
4 2, 1	765.2	8.46	6.9	5.69	772.1	8.44
5 2,15	632.0	6.95	1.64	6.07	648.4	6.93
6 3, 1	378.7	5.55	3.58	3.60	414.5	5.38
合 計	3942.7	9.26	5.94	4.53	4002.1	9.20

第5表 漁協別出荷状況

漁協別	出荷 回数	く ろ の り		あ お の り		合 計	
		出荷量(千枚)	単 価(円)	出荷量(千枚)	単 価(円)	出荷量(千枚)	単 価(円)
出 水	6	3638.9	9.45	5.83	4.50	3697.2	9.36
野 口	3	206.8	6.59	—	—	206.8	6.59
川 内	4	51.2	8.73	—	—	51.2	8.73
串木野	2	5.4	8.54	—	—	5.4	8.54
谷 山	2	26.8	6.75	1.1	6.00	27.9	6.72
垂 水	1	6.4	11.20	—	—	6.4	11.20
岩 本	1	7.2	9.05	—	—	7.2	9.05
合 計		3942.7	9.26	5.94	4.53	4002.1	9.20

定 置 観 測 (6月分)

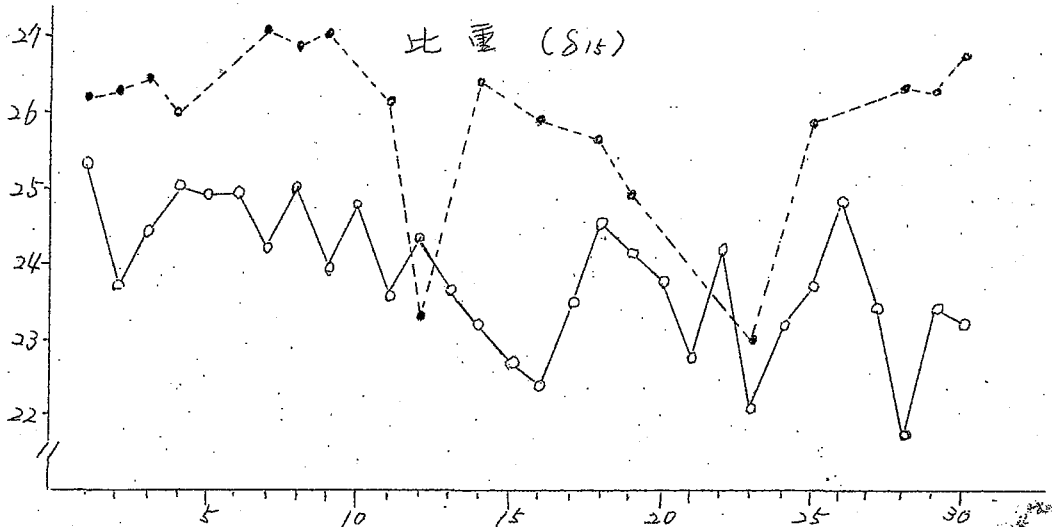
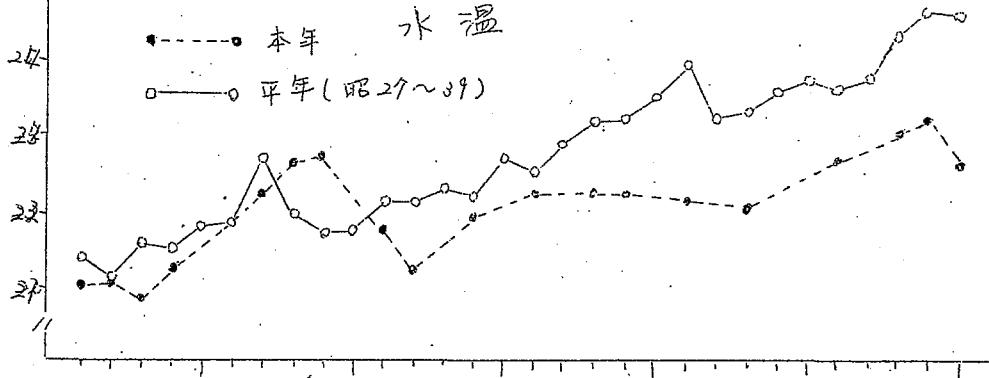
養 殖 部

○ 旬別平均水温、比重(満潮時)

旬	水 温 °C				比 重 °15			
	本 年	前旬差	前 年 同期差	平年差	本 年	前旬差	前 年 同期差	平年差
上	21.65	+1.75	-0.26	-0.03	26.57	-0.32	-0.58	+1.95
中	21.90	+0.25	-0.67	-0.74	25.40	-1.17	-1.61	+1.77
下	22.58	+0.68	+0.02	-1.22	25.66	+0.26	+1.12	+2.32
月平均	22.02	+2.61	-0.26	-0.66	25.93	-0.79	-0.26	+2.06

○ 水 温

20.8~23.2°Cと変動し上旬の上昇傾度は大きかったが、中~下旬は横這い状態である。入梅と同時に降雨が続き水温の上昇も少ないためと考える。月平均水温は22°Cと前月より2.6°Cの上昇を示したが、平年値より0.6°C低目となった。



○ 比 重

22.9～27.1と大巾に変動した。中、下旬は降雨により変動がみられるが概して高かんを保っている。月平均比重は25.9で前月より0.8、前年6月より0.3ほど低目を示したが、平年値より2.1も高かんであつた。

漁 村 の こ と わ ぎ (その3)

北 山 易 美

○ てんどい ほどい

獲れた魚を網元の承諾なしに網子たちが勝手気ままに自由に持つて帰るような場合に、てんどいほどいと言う。

○ うぼら吹き

自分の事を大風呂敷を拡げて話す法螺吹きである。

○ ウナギのぼり

会社や官公署でよく見られることであるが、抜てき組でなくて1段1段と階段を昇るように年を追うて上役に昇進していくことである。丁度ウナギが水のしたるところを這い上るのに例えたもので、全国的にいわれている言葉である。

○ ガネにどんぢ

ガネはカニ、どんぢはくいを打ちこむ木製の大きな槌である。句の意味は大槌でカニを叩き潰した状態を言つたのであるが、叩かれたカニは原型もないようにベツシャンコになる。不漁に不漁が続いたところに台風で船を大破して再起不能というとき、ガネにどんぢだという。

○ 岩ウナギのようなワロ

淵になつたところの岩石の間に長さ1.5mくらいの大ウナギがいる。鹿児島県では柱くらいに大きいことから、ハシタ(柱)ウナギという。また川の主ということもある。これは釣をしかけても餌だけを取つて容易にかゝらず姿も見せない。この餌だけ盗んで釣にかゝらないことを人間に例えて悪がしこいずるい人を岩ウナギのようなワロ(ワロはやつの意)という。

○ かれんよか船

漁業は水ものといわれているが、事実同じ大きな船で同時に漁場に着いても運のよい船はよく釣る。ついていない船はどこへ行つても釣れない。このようになつている即ち運のよい船を「かれのよか船」という。

不漁が続いて経営困難となつた船を買取つて漁業をしてもついでいない船はどこまでもついでいない。仕込みをして出漁しても毎航海漁運に恵まれない。こんなとき「かれの悪い船はやつぱり釣れない」という。

進水のとときに大漁旗を掲げると「旗を多くかるた」というが、かるたと言うのは背負うということであるから「かれんよか」は幸運を背負つているという意味ではないだろうか。

○ 取つてん取らず

大漁をしても価格が安く仕込み経費元々ということがある。所謂大漁貧乏である。獲れても儲けは何もない、損も得もない。俗にいう骨折損のくたびれ儲けのとき取つてん取らずという。

○ 魚取いのいつさん食い

昔の漁師は宵越しの金は縁起が悪い。明日は明日でまた獲る。あるだけ飲んでしまえ、何本でもじやんじやん持つて来いと大尽風を吹かして飲んだといわれるが、翌日が荒天とくればどうにもできない。居つゞけもできずわびしく脇枕で日和待ちをせねばならないのである。

これは酒だけに限つたことではない。食物もこの調子で金のある間は米の飯に珍味佳肴、時化が続いて10日も20日も漁がないと粗食となつて毎日借買ひ暮しとなる。これがいつさん食いである。

鹿児島語で1回1回とか、その場かぎりの場合いつさんというが、漁師たちのこのような有るときだけ、その時だけの生活を唄つた句で明日を或は将来を考えないふしだらな食生活を「魚取いのいつさん食いということがある」といつて戒める。いつさんのさんは算で、その場その場の精算という意味ではないだろうか。

○ 漁師の一升飯

農業は朝から夕方までの作業であるが沿岸漁業は昼すぎ沖に出て宵から明け方まで操業して帰るのが普通である。従つて食べる回数が多いことになるので沖に行くときは2回分の弁当とその他に夜食を持つて行くのである。このように漁師は農家の人より食べる量が多いという句である。1升というのは1人で1升食べるというのではなく、他の職業の人よりも多く食べるという形容である。

○ 噴つごつ 湧つごつ

釜が湧いて熱い泡を噴くように、また岩間からの湧水がこんこんと湧き出るように魚が尽きることなく獲れ、或は増えるようにという意味で縁起のよい言葉とされている。

○ 船は内之浦ぎい

内之浦は鹿児島県肝属郡内之浦町である。昔からブリ定置漁業の盛んな漁師町であつたが、今は漁業よりも東京大学宇宙空間観測所、所謂、東大のロケット実験地で世界的に知られるようになった。

往時は上方との取引が行なわれていたため、取引につれて漁船も日向の中古船をよく購入していた。しかし中古船のために内之浦で使用した後はもう老朽化

して使用にたえないので廢船にせねばならなかつた。いふなれば内之浦は漁船の最後の地であつた。

また上方の交易船は豊後、日向の各港に寄港して本土の最南端の内之浦まで来て荷役をすまして引返していたのである。

内之浦のぎいのぎいは「まで」ということで、こゝまで即ち内之浦が最終港という意味もある。

(鹿児島県漁業公社専務取締役)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5月から降り続いた梅雨も本土より一足先きに晴れあがつて北九州や中国地方の豪雨を他所に連日暑い日が続いている。

六月末には全国資源保護協会長の田村博士が来島、瀬戸内町多年の宿願である海上国立公園の調査をして貰つたところ、海のきれいなことそれに山の自然さなどハワイや濠洲の景観にも劣らぬとの事で瀬戸内町民を大いに感激さしたのであるが続いての話は道路の悪いことや、観光客を受入れる設備の整つていないことそれに余りにも本土から遠く僻地であること等まだまだ国立公園の指定を受けるにはほど遠いということのようである。

国立公園となると瀬戸内町だけでなく奄美本島は勿論のこと徳ノ島、沖永良部島喜界島、与論島の各町村も一体となつて協力し合う必要があるようだし、今後その話し合いもあることだろう。

最近奄美大島への観光客や學術調査団は年々増えていることだし、テレビやラジオでの紹介も多く、誠によい機会のようにだ。

この機を逃がさず忍耐強く奄美の海のきれいなことや陸ではバナナやパイナップルをしてクロトンの島であることを大いに宣伝して一日も早く日本初の海上国立公園を実現して貰いたいものだ。

(前 田)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 ☆ 養 魚 場 の 動 き ☆
 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1、概 況

水温は依然として低温状態で例年からすると平均で2～3℃の低温である。各魚種とも疾病もなく順調に成育している。

稚ます配付は8回行ない37,000尾を売却した。

あゆも順調に成長しているが水温上昇が遅れていることと降雨が多かったため商品サイズ(50～60g)には今しばらくかかる。6月5日稚あゆ30kgを購入した。

この第2回目の産卵は6月2日行ない別表の成績であった。

第1回分の稚ごいも現在2～2.5cmに成長し7月中旬には配付できそうである。

2、飼育現況表

魚 種	6月1日飼育数	死 魚 数	販 売 数	6月給餌量	増 重 量	7月1日飼育数
稚ます候補	750,563尾	5,771尾	37,000尾	1,123.2kg		707,590尾
食用ます	2,627kg	25尾 3.9kg	42.4kg	655kg	356.3kg	1,272.7kg
親ます候補	2,450尾	3尾 1.3kg		326.9kg		2,447尾
親ます	468尾	9尾 8.2kg				459尾
あゆ	560kg 28,244尾	1,833尾 13.6kg	0	1,317kg	320kg	866.4kg (3,391尾)
親ごい	200尾	0		126.0kg		200尾
稚ごい	394,000尾		0	210kg	第2回産卵分 780,000	1,264,000尾

6月5日稚あゆを0.0kgを購入した分を含む。なお死魚数のうち1,500尾6.0kgは輸送中及び放養後に死亡した分を含んでいる。購入魚は1尾平均4.0gで7,500尾であった。

第2回産卵分87万尾との計、減耗等は取揚時でないとは判明しない。

3、給餌の概要

6月の魚種別使用餌料は下表のとおりである。

稚 ます		食 用 ます		親 ます 及 候補	
ます餌付用 №2	3298 ^{kg}	魚(北用)粉	272.5 ^{kg}	北洋魚粉	134.9 ^{kg}
// 稚魚用 №2	622	ます餌付粉末	55.0	ます餌付粉末	22.5
// // №3	90	ます成魚用粉末	105.0	ます成魚用粉末	56.0
フィードオイル	274	小麦粉	130.0	小麦粉	67.5
		魚肝	67.5	魚肝	40.0
		ます用ペレット №5	25.0	ます用ペレット №5	6.0
		ビタミン混合	3.75	ビタミン混合	3.12
				マツケラム氏塩	1.92
				nf - 180	0.6

あ ゆ		親 ご い		稚 ご い	
北洋魚粉	427.0 ^{kg}	こい用粉末	27.8 ^{kg}	こい用粉末	17.0 ^{kg}
あゆ用配合粉末	271.0	小麦	94.2	こい稚魚用 №2	4.0
小麦粉	130.0	ユベラフード	0.122	ユベラフード	0.34
鮮魚(あじ)	323.0	ビタミン混合	1.22	nf - 180	0.34
魚肝(かつお)	166.0	こい用ペレット №5	4.0		

摘要 マツケラム氏塩はミネラル源で親ますにビタミン混合と共に卵質向上のためと健康維持のために与える。餌料に対して1%。

4. こいの産卵概要

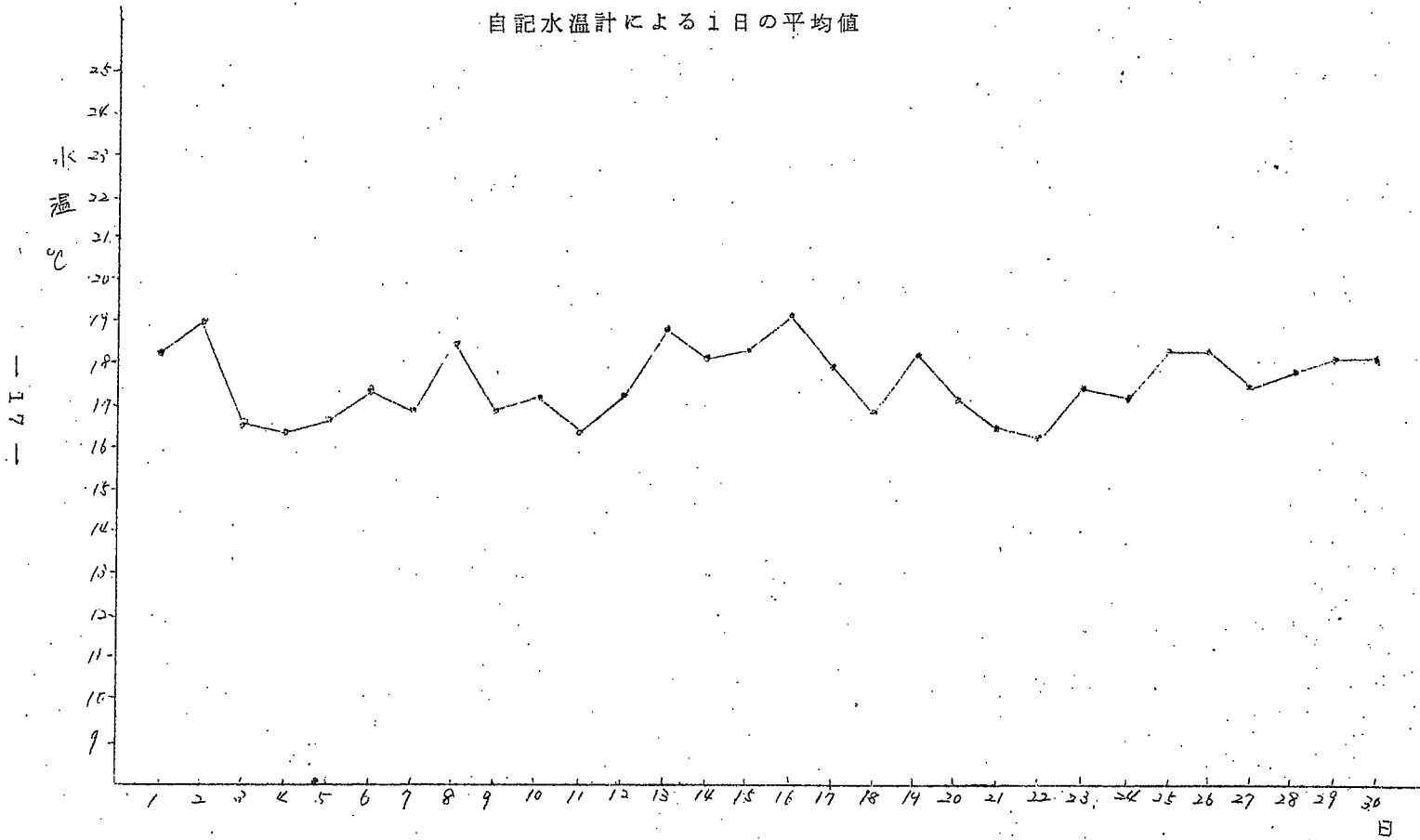
第2回目の採卵を6月1日行ない下表の成績であつた。

産 卵 月 日		6 月 2 日	
使用親魚尾数	♀の尾数(重量)	15尾(21.98 ^{kg})	
	♂の尾数(重量)	45 (58.0 ^{kg})	
産卵した♀の尾数		15尾	
産卵後の♀の減重量		3.480 ^g	
換算卵数		1,740,000粒	
1尾産卵数		116,000粒	
推定ふ化率(尾数)		70%(1,218,000尾)	
放養尾数(ミジンコ池)		卵数の50% 870,000尾	

備考 換算卵数 $N = n(W - W_0)$ $n = 500$ 1gの平均卵数
 W = 産卵前の♀重量
 W_0 = 産卵後の♀重量

5、6月の水温変化

定点 用水路
自記水温計による1日の平均値



6、にじます稚魚の配付内訳

6月の種苗用ます稚魚は1尾5～6gものを下表のとおり配付した。

配付月日	配付尾数	配付先
6月11日	3,000尾	串木野市 松下彰
6月15日	5,000	熊本県芦北郡湯之浦町 岩間安喜
6月16日	12,000	吉松町 富永良文 久木田信夫
6月17日	6,500	谷山市 白石良雄(代表)
6月23日	3,500	吉松町 宮田辰美
6月26日	3,000	霧島町 森満政一
6月28日	1,000	熊本県人吉市田野 住友林業 Ⅲ
6月30日	3,000	吉松町 竹中次男

7、指導

指宿、山川、開聞、吉松、大口、薩摩町、宮之城、川内～養魚指導
谷根～養魚指導及び適地調査

川内、大口、薩摩町、宮之城、川内～養魚指導
指導及び適地調査

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 業 務 概 況 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 漁業部

7月定線観測

期 間 7月6日～7月13日
使用船 照南丸
担当者 川上 市正

沿岸海底調査

昨年こしき島海域の調査を行ない漁業用海図を作成したところ各地から要望多く約300部を配布した。

本年は隣接の野間池海域を二次に亘って実施の予定で1次航海7月19日～7月31日終了 (担当者 竹下 克一 , 岩倉 栄)

撒餌式魚礁試験

これはエアレーションと微網撒餌の併用によつて随時魚礁効果をつくらんとするもので、6月11日～19日迄の9日間照南丸をもつて川尻沖合に於いて試験を行なつたが集魚効果を確認するに到らなかつたので次年度は実施方法等検討の上継続の予定。(担当者 岩倉 栄)

サバ標識放流

西海区水研の用船(照南丸)によつて6月23日～7月2日の間主として屋久島海域においてコマサバの釣獲を行ない、約4300尾放流した。7月末迄に放流位置附近においてポツポツ再捕されつゝある。(担当者 岩倉 栄)

✿ 小型巾着網漁業試験並びに指導

№1 6月27日～7月8日

串木野市島平及び鹿兒島湾内海潟において試験操業を行う。

№2 7月24日～7月31日

こしき島地区 鹿島 (里)

屋久島地区 宮ノ浦 にて試験操業を行う。

各地域とも企業化の意欲が旺盛である

使用船 かもめ

担当者 川上 市正

○ 養 殖 部

✿ 鹿兒島湾内定点水質調査

7月13日～16日に指宿、垂水、牛根、赤水の4定点で採水したのについてSkeletonema, Nannochloris, Chlamydomonas, Microalgae, Danaliella, Monochrysis の6種によるBio-assay を実施した。(担当者 瀬戸口 勇、山口 昭宣)

✿ イセエビ、フィロゾーマ飼育

7月14日桜島水族館水槽でふ化したフィロゾーマ幼生を水試実験室に移し飼育中で、8月2日に第3回脱皮がはじまった。

(担当者 山口 昭宣、椎原 久幸)

✿ ノリ糸状体培養

南日本産各地のアマノリ品種の糸状体培養を継続中。

7月下旬に一部黄斑病の発生がみられ、塩化第一銅10ppm 12～24時間処理で防除した。(担当者 新村 巖)

○ 製 造 部

✿ 加工原料としての凍結イワシの凍結貯蔵に関する試験継続中。

(担当者 是 枝 登)

✿ オキツノリたい色防止試験

オキツノリ製品の品質保持のため適正な処理方法を検討、赤外線乾燥、箱詰の二者は暗室放置同様効果を示した。

(担当者 石神 次男、是枝 登)

✿ 鯉加工試験

高度利用のため粕漬、味噌漬、くん製、こいこくを試作し、いずれも良品を得た。(担当者 石神 次男、木下 耕之進)

✿ 先進地技術交流報告会(阿久根市) (出席者 石神 次男)

✿ 大隅地区指定工場指導 (担当者 石神 次男、是枝 登)

✿ 漁家担当生活改良普及員及び水産業改良普及員合同研修開かる。

7月30日 生改、水改を対象にみりん干、塩辛、佃煮の製法につき合同研修。(担当者 製造部)

○ 調 査 部

✿ ハマチ人工餌比較試験

供試魚約2000尾を用いて5、6月に行なつた餌付試験に引き続き、養成試験を実施中。（担当者 九万田一己、荒牧 孝行）

✿ トラフグ蓄養斃死調査

39年度沿岸漁業構造改善事業の一環として、長島町漁協はトラフグ約4000尾の蓄養をはじめたが、梅雨後の水温の上昇と共にデイクリドフオールの寄生が多くなりその為1日約40尾程度の斃死が続出している。対策としてはネグボンの投与を継続中。（担当者 荒牧 孝行）

✿ ハマチ病害対策指導

本県のハマチ蓄養事業は垂水市を中心に約30万尾の蓄養を行なつているが、最近餌料鮮度の悪いものを投与し、その結果内臓障害をおこし、かなり斃死がみられた。現在、フラドリゾンやグロンサン等の投与を行ない斃死も減少している。7月末の1尾当りの大きさは2.00g前後の大きさに成長。（担当者 九万田一己、荒牧 孝行）

✿ 水 質 分 析

ハマチ蓄養試験地、トラフグ蓄養場、種苗センター適地調査等の水質、底質分析を行ない、現在資料整理中。

（担当者 上田 忠男、弟子丸 修、武田 健二）

人 事 異 動 （水産試験場関係）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

7月7日付

命 大島分場長（鹿児島県水産試験場主任研究員）

塩田 正人

命 鹿児島県水産試験場主任研究員（旧任 大島分場長）

前田 耕作

命 鹿児島県水産試験場庶務主任（旧任 身体障害者更生指導所庶務主任）

伊藤 博

7月16日付

命 鹿児島県水産試験場研究員（旧任 大島分場研究員）

藤田 薫， 弟子丸 修， 椎原 久幸

命 大島分場 研究員（旧任 鹿児島県水産試験場研究員）

武田 健二， 塩満 捷夫

命 鹿児島県水産試験場事務所主事（旧任 鹿児島県水産試験場主事）

富山 邦彦